

「映画作法(さほう)」を紐解く

大阪芸術大学 映像学科 准教授 豊浦 律子

1895年にリュミエール兄弟が動く写真をスクリーンに投影して公開、これが現代にまでつながる映画の起源とされている。フィルムで撮影し、映写機で上映する。専用の施設が必要でありそれら映画館と呼ばれる施設で上映されるものが「映画」と呼ばれる。しかし、デジタルの台頭により劇場でもフィルムでの上映はほぼなくなりつつある。映画の発明からおよそ100年以上、フィルムが主流であった世界がたった数年でデジタル技術にほぼ変わってしまった。それに合わせて、映画の制作現場も大きく変わってきている。フィルムが主流の頃に映画界を支えてきた重鎮たちは今の世の中をどのように思っているだろう。安易に映画の制作ができる現状において今一度立ち止まって「映画の作法」を改めて見直すことが本研究である。

戦時中に発足した大映映画撮影所で活躍した森田富士郎氏が当時は光量を測り露出を決めるための露出計もなかった時代、撮影は勘であり、匙加減が現像であったと語っている。フィルムの歴史と共に歩んだ森田から富士フィルムが映画用フィルムの生産を撤退した折に語った内容が以下である。

「大事なものは光」

1926年「狂った1頁」衣笠貞之助監督作品。当時ライト自体はなく、光のニュアンスを表現するのにセットの壁に銀粉を撒き反射をよくし、日光の入るガラスステージでの撮影を行った。エジソンも当初は陽の光が入るガラスステージであったように、写すことが大前提で光による演出とは中々できない状況だったようである。その後タングステンライトが台頭し、光の表現ができるようになる。その後日本では撮影部と照明部とに分かれてしまい、日本の撮影監督はハリウッドのような撮影監督とは全く違う役割を担うようになってしまう。「光と影の演出」、その主導権を人任せにしてしまったことは日本映画がコースを間違えてしまったからだとして森田は嘆いていた。大映時代から活躍した照明技師の中岡源権氏は、光は強さであり、映画の照明は現実とは違う。それぞれのシーンでその演出を助ける光が大切であり、余計なものを消すのも大事なものを写すのも光であると語っていた。

撮影技術を担う二人の重鎮の言葉から伺えるように、フィルムであろうとデジタルであろうと大切なものは光であり、作品の画作りにおいて大切なことは光による演出であると言える。当初のデジタルはとらえる光の幅が狭かったが、最近ではRawやlogといった記録方法により、フィルムとあるいはフィルム以上の光の幅を収録することができるようになってきた。このことから十分「光の演出」を捉えることができるのだが、フィルムのように撮影して現像するまで結果がわからない媒体ではなく、安易にモニターで結果を確認することができてしまう現状で、果たして当時のような写すことに真剣に向き合っていた頃と同じであるかは疑問を残すところである。

大切な光をいかに記録するかという面において、フィルムの開発の歴史から学ぶことができる。モノクロフィルムからカラーフィルムへ、主にイーストマンコダック、アグファフィルム、そして富士フィルムが使用されてきた。森田の初カラー作品であった「鞍馬天狗」(1965)では富士フィルムを使用、しかしこのフィルムはグリーンが発色が強く竹林の撮影では葉裏の光がけばけばしく、決定的であったのは女優の化粧。見た目では綺麗であったのに、ラッシュを見るとシミがグリーンに浮いて見え、やむなくイーストマンに切り替えることに。しかし、当時の富士フィルムの技術者にラッシュを見せると、その2ヶ月後には新製品を開発、そのスピード感に感心させられたとのこと。日本の技術の素晴らしさをその後も富士フィルムによって見せられ続けたのだが、2012年に生産終了となってしまった。フィルムがなくなることに、「絶望、落胆、哀惜」と森田は語っていたが、同時にフィルムの欠点としてフィルムはコピーすれば劣化する、同じものができないのが欠点。そしてスピード感が欠如している。いずれフィルムはなくなるだろうと予測していたという。フィルムがなくなることで森田が最後に懸念していたことの一つは、技術継承がなくなってきたことである。確かにテクノロジーの発展は素晴らしいが、それを作ってきたのは人であることを我々は後輩に伝えて行かなければならない。

技術のみでなく、「映画作法」として大切なこと。撮影監督は絵画を見てどう感じるか、観察できるか、審美眼を養うこと。自然の有り様を勉強し、どうすれば相手に伝わるかを考えること。録音技師である大谷巖氏は録音の一番大切な仕事は狭いスクリーンに奥行きと横への広がりを画面に与えること、見えてないところを観客に想像させることだと言った。音もデジタルによって随分表現の変わってきた部所ではあるが、根本はやはりフィルムだろうとデジタルだろうと大切なことは同じようである。

同時期に活躍した井上昭監督は「ドラマの中で一番重要なのはストーリーではなく、テーマである」と語っている。なるほどこちらもフィルムもデジタルも関係なく、普遍的な「映画作法」ではないだろうか。

フィルムの歴史と共に歩んできたお歴々のインタビューからフィルムであろうとデジタルであろうと「映画」作りにそこはそれほど重要ではないとかがえる。

どの部所においても最も大切なことは観客に何を伝えるのか、その一点であるように思う。

フィルムもデジタルも人間にどのように見えるのかということをお前提としているので、根本は同じであり、結局は技術としては継承していることになる。

今も昔も映画制作としての芯は変わっていないということをお改めて実感し、そのことを後輩に伝えていくことが改めて大切であると今回の研究の結果として締めくくる。